想いを糧に

茨城県立水戸桜ノ牧高等学校常北校　実習教諭　河原井　雅子

平成 23 年の夏、私は福島大会囲碁部門視察要員として、初めて全国高総文祭をこの目で見、体感してきた。震災直後にも関わらず、精一杯の歓迎をしてくれた福島の高校生の姿は、私を熱い想いに駆り立てた。福島大会のように心温まる、そしてさらに茨城らしい、そんな大会にしたい！という熱い想いである。

私には、大きく３つの想いがあった。全国から集まる選手たちへの想い、そして囲碁を愛するすべての高校生、すべての人々への想い、そしてもう一つは、今回偶然にも囲碁に出会い、力を借りることになるであろう多くの高校生や先生方への想いである。

漠然とした私の想いに具体的なイメージを与えてくれたのが、平成 24 年５月の囲碁部会理事会に、文化課より特別参加された大﨑指導主事の言葉だった。茨城では「おもてなし」を大きなテーマに高総文祭を考えている。その意味も込めて、囲碁部会でも何か手作りの記念品を作れないだろうか、ぜひアイディアを出してほしい、とのこと。私にとってワクワクするようなこの言葉がその後大きな原動力となり、「囲碁缶バッチデザインコンテスト」の開催、優秀作品による缶バッチの制作、さらに全国の選手への記念品と、囲碁部門の「おもてなし」の活動の輪は大きく広がっていった。

多くの出会いがあり、たくさんの力をいただいた。出会えたすべての皆さんに、そして、力を貸してくださったすべての皆さんに、そして一緒に汗を流した仲間たちに、心からの感謝の言葉を伝えたい。皆さんありがとうございました！

感謝

茨城県立土浦第一高等学校長　豊崎　利明
（囲碁部門委員長）

いばらき総文 2014 囲碁部門が大成功裡に終えた事に喜びと安堵でいっぱいです。特に準備の段階からお骨折りいただいた堀江信人副委員長をはじめとする茨高文連囲碁部会の先生方には深く感謝申し上げます。そして高柿生徒実行委員会委員長をはじめとする生徒実行委員会の皆さん本当にありがとう。今回は２人の女流棋士を含む３人ものプロ棋士をお招きし、たくさんの指導碁や３人リレーの大盤解説など囲碁の醍醐味を十分味わうことができました。特に溝上知親八段には大会前から何度も水戸に足をお運びいただき、親しくご指導いただきました。そのお人柄に触れ、多くの生徒がファンになりました。河原井先生のアイデアで始めた缶バッチ製作はデザイン募集から始まり思い出に残るものとなりました。試合進行に欠かせない重要な役割としてパソコン（プログラム）操作には水戸工業高校の生徒たちの活躍が光りました。審判役には囲碁仲間であり、かつて囲碁部の顧問であった退職教員の皆さんにお手伝いいただきました。囲碁部の生徒たちだけではこの大会は運営できません。囲碁を何も知らない水戸商業高校の生徒たちが積極的に関わり手伝ってくれたことでこの大会を明るく盛り上げてくれました。一人一人がおもてなしの気持ちで行動してくれました。皆さんのおかげで思い出に残る自慢できる高総文祭となりました。それは私だけでなく関わった方々全員の実感だと思います。改めてその全ての皆さんにお礼申し上げます。ありがとうございました。

表彰式の様子Ⅰ

表彰式の様子Ⅱ（終了後壇上から降りる選手たち）

出口でお見送り

茨城の PR も兼ねたお見送り